エンタ目

仙頭 武則

音楽に映画に飛躍の秋

■ビアリストックス

芸術の秋、音楽の秋だが気候変動の影響か、寒暖差の激しい近年の秋は気を付けないとすぐに通り過ぎてしまう。

二日、真夏日のその日、待望の甫木元空と菊池剛の二人組バンド「ビアリストックス」初の単独ライブが瀟洒なホールに五百六十人の観客を集め、開催された。

定刻に始まったライブはアンコールまでの一時間半、MCは一切なし。繰り出された十八曲はジャズ、ロックはもとより、あらゆるジャンルを軽々と横断、超越していくが、甫木元の確かな歌唱力と天賦の声がそれらを串刺しにして揺るぎない統一感を生み、不思議な懐かしさを忍ばせ、安堵感を漂わせる。とりわけ、複雑極まりない展開の『灯台』に私は注目していた。超一流のサポートメンバーに支えられた高度な演奏は圧巻だった。

終演後、魔法のアレンジを取り仕切る菊池が「リハの時間が足りなかった」と口惜しんでみせた。どこまでも完成度を追求してやまないその姿勢には敬服する。その場にいた音楽評論家が「誰もカラオケで歌えない」と評した甫木元の歌と共に、彼らの音楽は「聴く」ことの意味を再認識させてくれる。

（左から）ビアリストックスの菊池剛と筆者、甫木元空

アンコール時に、彼らは十一月三十日にオフィシャル髭男ディズムと同じレーベルから発売されるメジャーデビューアルバムのリリースを不意打ちのように告知し、三拍子の新曲『日々の手触り』を披露して幕は閉じた。

前作に続き、私がプロデュースした甫木元監督『はだかのゆめ』は三十一日に東京国際映画祭のニッポン・シネマ・ナウ部門でワールドプレミア上映となる。音楽はビアリストックスが手がけた。劇場公開は十一月二十五日。東京を皮切りに全国へと展開していく。名古屋はセンチュリーシネマで十二月九日公開の予定。芸術の秋は続く。

（名古屋学芸大教授、映画プロデューサー＝次回掲載は十一月十七日）